

# 味明物語「I」

明朝体というのほとんど漢字だけだったんですね。漢字を崩した草書体は、日本語の印刷用書体の大革命だったんです！

日本語書体があまり経験したことがなかった盛り上がりで日本中に味岡フォントが溢れ、文字も元気にになりました。ぼくも仕事でたくさんお世話になりました。

# 味岡伸太郎さんと 文字のこと 祖父江慎

漢字明朝体は数が多い分担作業を余儀なくされるが、たぶんほとんどが味岡さんの手によるものだから筋が通ってる。

味岡さんは今、明朝体の漢字を作っています。ウエイトは金属活字の初号くらいヘビーなのに、やぼったくなく美しくチャーミング。嬉しいのはヘアラインのモダンスタイルもできたこと。さらに今回、10種の仮名書体が加わってて驚愕です。かなも漢字も充実して大変なことになってきました。味岡さんの書体シリーズはどこまでいくのかしら……。

## 味明物語「I」

### 味岡伸太郎さんと文字のこと

### 祖父江慎

僕がまだ浪人生だった一九七八年頃、休みにさんの家に泊まりにいらした。味岡さんのデザイン事務所「スタッフ」は、住居の敷地内にあっ

味明/EB+草/M

て、そのスタッフの人たちが忙しく働いていた。僕も友達もグラフィックデザイン科志望だったんだけれど、とくに仕事の手伝いはさせてもらえなくて、まだ小学校に就学前のふたりのお嬢さんと遊んでもらっていて、肩車をして少ない髪の毛を引っ張られたり、お風呂で股間キックをされたり、ドラえもんを一緒に歌ったりしていました。

当時、味岡さんの事務所には写植機があった、そこ焼が縁で結婚したという奥さんが毎日文字印

本文組 漢字：本明朝M使用

字をしてました。味岡さんは酒屋さんの包装紙に使う書体にばっちり合う書体がないからって、オリジナルで作った仮名文字をガラス板に焼き付けて文字盤を作っていたんです。写植の文字盤まで作っちゃうデザイナーなんて未だに会ったことがないです。ちなみにこの書体は修正されて後に「小町」として発売されました。

事務所の壁には、大小いろんな珍しい筆がたくさんぶら下がっていて、味岡さんは、毎朝バケツいっぱい藍色顔料を木工用ボンドと水で溶いた絵具を作り、床に広げた和紙に大きな筆で点を打ち続ける作品を作っては奥さんに「紙がもったいないって叱られながらも続けていました。(その様

子は僕が大学二年の夏、アルバイトをしていた工作舎の雑誌『遊』の一九八一年八・九月合併号でも紹介されました。

そんなふうに書道にも親しんでいた味岡さんは、他にも平安時代の書家、藤原「行成」の書風をベースにした書体「行成」や、江戸後期の書家、良寛の書いた文字も、「良寛」として文字盤にちゃいませした。それに留まらず、日本語金属活字の最古期、明治八年に発売したといわれる弘道軒の楷書



小町・良寛インスタントレタリングカタログ表紙

# 流 壺

ロゴタイプデザイン: 味岡伸太郎

字を崩した草書体っぽい書体で、日本語は二種類の書体を組み合わせてできていたんだってことに、気付きましたよ。よく考それば、ひらがなもカナも漢字の明朝体と違和感がないように草書体を楷書風に書き直したような別の書体でもありません。味岡さんのこの仕事って、日本語の印刷用書体の大革命だったんです!

ちなみに、教育用の教材用書体ともいえる記号的な教科書体の骨格を活かして作られたであろう戦後の定番明朝体・石井ニューかな明朝体のような書体は、味岡さんの仮名書体シリーズに含まれていないんです。それも味岡さんらしくて面白いって思います。

体仮名「弘道軒」や、弘道軒との戦いに勝利して今や日本語活字の定番となった築地五号明朝体の後期バージョン「築地」まで作っちゃいました。それだけの仮名書体を明朝体の漢字と組み合わせで使用するんです。

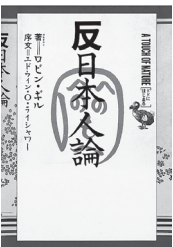
それまで明朝体というのは、漢字と仮名がセットになっていたものだと考えていた僕はびっくりしてしまいました。明朝体というのははもともと漢字だけだったんですね。仮名書体は、そもそも漢



行成  
(関戸本古今集)

行成 EB

行成 GH



上『文章読本さん江』  
齋藤美奈子、筑摩書房 2002年  
デザイン: 祖父江慎  
タイトルフォント: TA 楷 M

下『反日本人論』  
ロビン・ギル著、工作舎 1984年  
デザイン: 祖父江慎  
著者名フォント: 良寛

かといって、味岡さんは記号的な文字を避けているわけじゃないんです。ロゴやシンボルなどに使われる文字は、並んでいればなぜか読めちゃいますが、一文字ずつに分けると何の文字かわかりません。可読性って不思議です。まるで昔の連綿体で書かれた文字を確認しているみたいです。

**日** 本語明朝体の衝撃も間もないころまた味岡さんの事務所に遊びに行きました。そこで見たのは、またまたびっくり、なんと明朝用の味岡かな書体をゴシック体へ移行していたんです。しかも面相筆や溝引き定規も使わずに、トレーシングペーパーにマジックペンできゅつきゅつきゅつといきなり書きでした。レタリング授業

だったら絶対に先生に注意される書き方です。

考えてみれば、味岡さんは版下に文字を貼るときもめったに定規を使いません。版下どころかいきなり写植をフィルムで印字して製版フィルムにテープで文字を直貼りしたりもしていました。絶対に至んでるんじゃないかと怪しんで定規を当ててみても、なぜかちゃんと真っ直ぐに貼られているんです。水平垂直感覚が、すごいんです。

そんなこんなで一九八四年には、新しく写植メーカーに進出した(釣具などで有名だった)リョービから「味岡伸太郎かな書体シリーズ」として文字盤がたくさん発売されました。その頃は、写植の仕事は超安定してて「写植オベ

味明 良/EB+良/M

レーターの資格さえ持っていれば食いっぱぐれない」などといわれていたんです。

同じ骨格を持つ明朝体とゴシック体って、今となっては普通かもしれないませんが、その頃の日本語でそんな発想で作られた書体は、一九七〇年頃一世風靡したタイポスクラームだったんです。

明朝体とゴシック体のファミリー化を経て、ウエイトのバリエーションも増え、書体って何なんだろう？ という、それまでの日本語書体の歴史の中で経験したことのない盛上がりとともに、日本中に味岡フォントが溢れ、文字も元気になりました。ばくも仕事でたくさん味岡書体にお世話になりました。

鳥

書：味岡伸太郎

鳥

TA- 楷 M

鳥

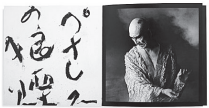
味明 EB

鳥

方眼 K250

鳥

ロゴタイプデザイン：味岡伸太郎



「大駱駝艦 川のホトリ」  
パンフレット  
2002年  
デザイン：祖父江慎  
書：味岡伸太郎

ついで、試作段階では、写植としては無理があつて消えた二倍サイズの「し」の字や、同じキヤラクター文字の揺らぎ違いの字形など、写植の文字盤ではかなわなかった文字は、インスタントレターリングとして発売されました。

そんなさなか、文字の入力システムもどんどん変わり始めたんです。写植も手動から電算写植になり、電算写植もDTPとなり…。

味明 榮/EB+榮/M

この頃、味岡さんの事務所にはでかいコンピュータが入りました。大変です！ それぞれの書体に明朝体タイプとゴシックタイプがあるうえに、L、R、M、DB、B、E、H、U…とウエイトバリエーションは細かいです。さらにモニター上で表

示される、ジャギーで構成されるビットマップタイプのフォントもサイズでバリエーションを作らなきゃです。それからアウトラインタイプフォント…。今はモリサワと合併したタイプバンクさんとも協力しての制作だったらしいんですが、やるのがどんどん増えてしまい、これでは味岡さんでもくたびれてしまうはず。

でも、そんな大変な時期でも、縦書きから派生した筆文字をそのままの形を維持したままできれいに横組みに組みかえるには、ベースラインをどこであわせればいいかという不思議な実験をしたり、お嬢さんの通う卒園アルバム用に子どもに書かせた文字でオリジナル文字盤を作ったりして

ましたよ。

かなフォントばかりでなく、漢字フォントだって作っている。楷書体なのにゴシック体な「TA楷」。びっくりです。

僕は、それからもずーっと味岡さんの影響を受けています。味岡さんは、建築デザインもやるし、美術作品も作っています。頼まれたことしかしないデザイナーが多い日本で、頼まれていない自立的なデザイナーやアートワークをどんどんやっていて、豊橋に住んでいるのに海外デザイナーみたい

です。  
味岡さんは、実は書道がめちゃくちゃうまい。多くのフォントデザイナーを知っているけれど、手書きの文字がヤバイほどいいのは、なんといっても味岡さんだと思います。僕にとって味岡さんは、書体デザイナーというよりも、フォントのデザイナーもできちゃう書家だなあって思っています。  
そんなこんなで味岡さんばいよいよ明朝体の漢字「味明」を作っています。ウエイトは金属活

味明 築C/EB+築C/M

味岡目 鬱木 鷗入  
味岡目 鬱木 鷗入

味明/EB

味明モダン/EB

字の初号くらいヘビーなのに、やばったくなく美しくチャーミング。

「魚・鳥」なごばさいごの四点の角度の勢いが気持ちいいし、「入・九」の横ラインもしつかり斜めって気持ちいい。

通常、漢字明朝体は数が多く分担作業を余儀なくされるけれど、味岡さんの場合は全て本人の手によるものだから筋が通っています。しかも多くのデジタルフォントは過去の活字をスキャン、トレースして整えていくことに専念しがちだけど、味岡さんはそんな面倒で無駄なことはしない。一気に決める。さすが書家だけある。…ご本人は書家じゃないと否定されるかもしれないけど。

現在すでに出ている築地初号タイプの「游築見出明朝体」①はオリジナルの金属活字ごおりにゆつたりとしているが、味岡漢字にはキレがある。もうひとつの金属活字初号タイプを忠実に起こした「秀英初号明朝体」②は、右下に向かってずつしりした重さがあるが、味岡さんのは軽やか

味明/EB+民/M

味岡目 鬱木 鷗入

③築紫A見出し明朝

味岡目 鬱木 鷗入

④小塚明朝H

味岡目 鬱木 鷗入

②秀英初号明朝撰

味岡目 鬱木 鷗入

⑤光明

味岡目 鬱木 鷗入

①築地タイプ 游築見出明朝

味岡目 鬱木 鷗入

⑥凸版見出し明朝

# 味明 [Family]

味明/EB

味丈  
逢樽  
味丈  
逢樽

N=JIS X0213:2004 例示字体

味明モダン/EB

味丈  
逢樽  
味丈  
逢樽

味明/EB+味明モダン/EB  
+味明N/EB+味明Nモダン/EB  
(N=JIS X0213:2004 例示字体)  
+それぞれに10種の仮名  
+10種の本文明朝体用仮名

漢字収録字数 3,637字  
内 JIS 第一水準 2,965字

仮名(本文明朝体用)

あ	あ	あ	あ	あ	あ
草/EB	民/EB	草/EB	民/EB	草/M	民/M
あ	あ	あ	あ	あ	あ
行/EB	秀/EB	行/EB	秀/EB	行/M	秀/M
あ	あ	あ	あ	あ	あ
良/EB	秀L/EB	良/EB	秀L/EB	良/M	秀L/M
あ	あ	あ	あ	あ	あ
築/EB	秀V/EB	築/EB	秀V/EB	築/M	秀V/M
あ	あ	あ	あ	あ	あ
築C/EB	弘/EB	築C/EB	弘/EB	築C/M	弘/M

だ。「筑紫A見出し明朝体」③は潤いがあつて滑らかに左右に広がる軽やかさがあるが、味岡さんの硬く締まりがある。「凸版文久見出し明朝体」④は丁寧で懐も大きめだけど、味岡さんの強くて文字のキャラクターに合わせて懐が締まっている。見出し明朝体漢字も、仕事に合わせて選んで使うことができる時代が来ました。すごく嬉しいです！

そして、一番嬉しいのはヘアラインのモダンスタイル「味明モダン」もできたこと。今までのモダンスタイル太明朝⑤⑥は、たいていシルエットが正方形に近くフトコロもかなり大きな物ばかりで、エレメントの魅力と使用サイズとが、かみ合わなかった。でも、味岡さんは横着ともいえる技でそのまま骨格をモダンスタイルに移行して、とても美しいです。これでやつと大きな見出しでもモダンでエレガントに組むことができます。

味明 秀/EB+秀/M

モダンスタイルなのに、いわゆる「父」などのヒゲやヤネをしつかり残している。一般にそれらは古典的とされ排除されがちだったけれど、大きく使うための美しさを優先させれば、あつたほうがいに決まっています。

さらに今回、あらたに今までになかった仮名書体が加わって驚愕です。金属活字の二大初号タイプの仮名が二種、そして三号、五号それからずつとあこがれていたルビ用に使われた七号活字タイプまで！ルビ用仮名は、当時の印刷時にすでにつぶれているので、かなりの解釈が必要なんです。すごく楽しみです。

あと、今までとはタイプ違いの楷書タイプの仮名書体も。こんなふうには、かなも漢字も充実して大変なことになってきました。味岡さんの書体シリーズは、これから先、いったいどこまでいくのかしら…。

味明 秀L/EB+秀L/M